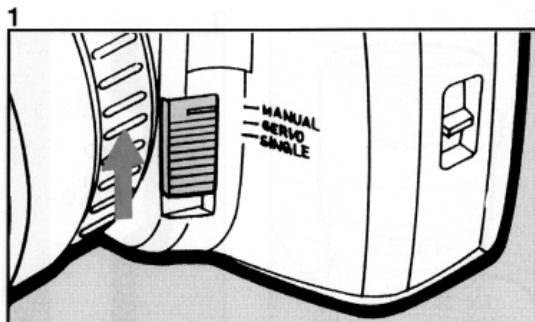


Ⅲ応用的な使い方



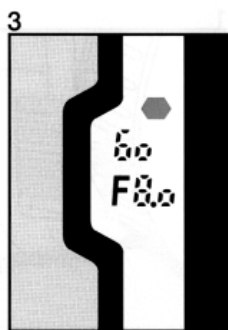
マニュアルフォーカスレンズを使う場合
従来のKAやKマウントレンズで、開放F値がF5.6以上の明るいレンズ(F1.2~5.6)を使うと、ファインダー内の合焦表示 $\square$ を利用した手動ピント合わせができます。

使い方

1. フォーカスモードレバーを **MANUAL** にセットします。

応用的な使い方

36



2. ファインダーを覗きながらシャッターボタンを半押しした状態で、レンズの距離リングを左右に回してください。
3. ピントが合うとファインダー内の合焦表示 $\square$ が点灯して知らせます。そのままシャッターボタンを押し切って撮影してください。

- * ピントが合うと、ファインダー内の合焦表示 $\square$ の点灯と同時に「ビピッ」と電子音が鳴ります。(ペンタックスファンクションNO.1で変更可)
- * KAFおよびKAF2マウントレンズを使用しても、フォーカスモードレバーを **MANUAL** にセットすると同じ操作になります。

* 旧タイプのねじ込み取り付け式レンズを別売りの「マウントアダプターK」で取り付けても、ファインダー内の合焦表示 $\square$ によるピント合わせはできません。

スナップインフォーカス撮影について

KAおよびKマウントレンズを使用して、フォーカスモードレバーを **SINGLE** にセットすると、別売りのケーブルスイッチFなどを利用してピントが合ったときに自動的にシャッターが切れるスナップインフォーカス撮影ができます。

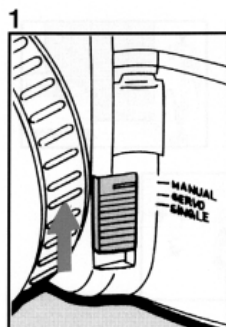
1. レンズはKAおよびKマウントレンズを使用します。
2. フォーカスモードレバーを **SINGLE** にセットします。
3. 写したいものが通りそうな位置にピントを合わせます。
4. ケーブルスイッチFなどを使って、シャッターボタンを押し切った状態にします。
5. 写したいものがピントを合わせた位置に来ると、自動的に撮影されます。

応用的な使い方

オートフォーカスが使えない場合

以下の理由で、オートフォーカスやファインダー内の合焦表示  が使えない場合は、ファインダーのマット面を利用して従来の一眼レフカメラと同様に手動でピント合わせをしてください。

- 「オートフォーカスの苦手な被写体」で合焦表示  が点滅するとき。
- 開放F値がF5.6より暗いレンズを使っているとき。
- ペローズ100mm F4、シフト28mm F3.5(シフト状態)、レフレックスタイプのレンズを使用したとき。
- 旧タイプのねじ込み取り付け式レンズを別売りの「マウントアダプターK」で取り付けて使用したとき。

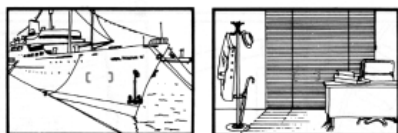


使い方

- フォーカスモードレバーを **MANUAL** にセットします。
- ファインダーを覗きながら、レンズの距離リングを左右に回してファインダー内の映像が最もはっきり見えるようにピントを合わせ、撮影してください。

応用的な使い方

(2) オートフォーカスの苦手な被写体



応用的な使い方

オートフォーカス機構はきわめて高精度のものです、万能ではありません。被写体の明るさ・コントラスト・形状・大きさなどによって、ピントが合わない場合があります。ファインダー内の合焦表示  を利用してピント合わせを行なう手動ピント合わせも同様です。そんなときは、被写体とほぼ等しい距離にあるものにフォーカスロックをしたり、フォーカスモードレバーを **MANUAL** にセットして、従来の一眼レフカメラと同様にファインダーのマット面を利用して手動ピント合わせを行なってください。

- A Fフレーム  に白い壁などの極端にコントラスト(明暗差)の低い被写体がある場合。
- A Fフレーム  に光を反射しにくい被写体がある場合。
- 非常に速い速度で移動している被写体。
- A Fフレーム  に横線のための被写体や細かな模様の被写体がある場合。
- 遠近のものがA Fフレーム  の中で同時に存在する場合。
- 反射の強い光、強い逆光(周辺が特に明るい被写体)。

アクセサリーの注意

以下の条件では、オートフォーカスやファインダー内の合焦表示 $\square$ を利用した手動ピント合わせができません。ファインダー内のマット面で手動ピント合わせをしてください。

- 特殊なフィルターや「マジックイメージアタッチメント」・「ステレオアダプター」などを使った場合。
- オートフォーカス機構の一部にハーフミラーを使用していますので、一般の偏光フィルターを使うとオートフォーカスの精度が低下します。オートフォーカスで使用する時には円偏光フィルターをご利用ください。
- 「接写リング」や「オートベローズ」を使った拡大接写撮影の場合。

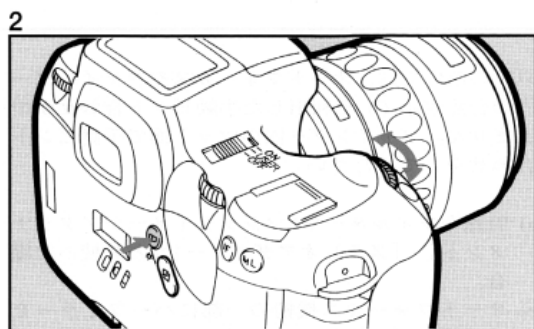
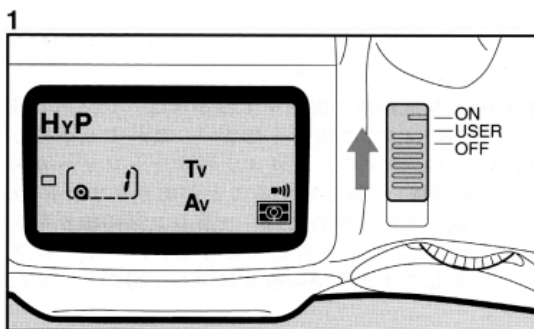
SMCペンタックスFソフト85mm F2.8使用時の注意

約1.5mより近距離の撮影をするときは、レンズの絞りをF2.8～4.5でご使用ください。これより小絞り(F5.6～32)にすると、カメラのオートフォーカス(FIも同様)が誤合焦することがあります。F5.6以上の絞riを使う場合には、一旦レンズの絞りをF4.5に合わせてピント合わせを行ない、フォーカスロックをしたまま希望の絞りに戻して撮影してください。

応用的な使い方

40

(3) 測光モードの切り替えについて



応用的な使い方

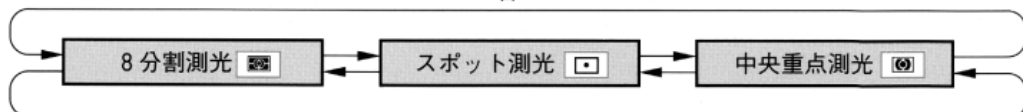
Z-1Pは、撮影者の好みで測光モードを分割測光から中央重点測光あるいはスポット測光に切り替えることができます。

スポット測光は被写体の限られた部分だけに露出を合わせたいときなどに、また、中央重点測光は経験的に露出補正をして撮影したいときなどにご利用ください。

切り替え方法

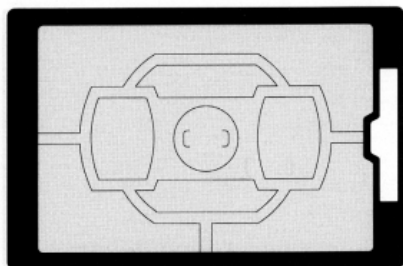
- 電源スイッチを **ON** にします。
- 測光モード切り替えボタン $\square$ を押しながらTvダイレクトダイヤルを回して希望する測光モードを選びます。

右へ



左へ

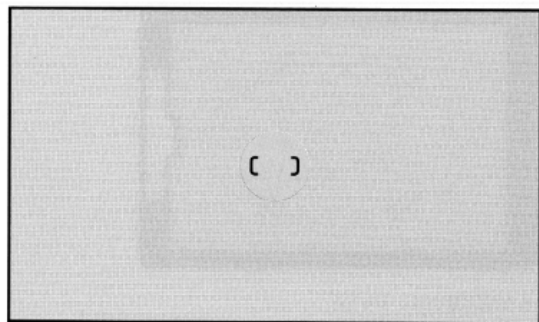
- * 電源スイッチがユーザーポジション **[USER]** では、測光モードは分割測光になり測光モードの切り替えはできません。ただし、ユーザーポジションへのユーザーセット機能により、分割測光以外の任意の測光モードに設定することができます。(75ページ参照)
- * レンズ情報接点のないレンズ(Aレンズより前のレンズ)を使用したときは、分割測光は使用できませんので、中央重点測光かスポット測光をご利用ください。電源スイッチがユーザーポジション **[USER]** では、中央重点測光だけとなります。ただし、ユーザーポジションへのユーザーセット機能により、スポット測光に設定することができます。(75ページ参照)
- * **A50mmF1.2** レンズの場合、絞りA位置以外では分割測光になりません。



8分割測光について

Z-1Pは、高精度のTTL 8分割測光モードが採用されています。図のように画面の中を分割して測光を行ない、様々な光の条件下で最適な露出を得ることができます。

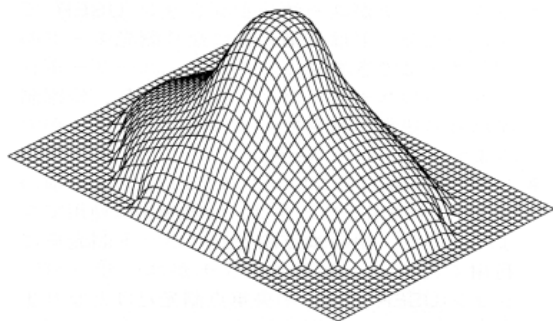
例えば、従来の平均測光方式では逆光の人物撮影のときなどに、背景の明るい部分が全体の露出に影響を与えるため、写したい人物がどうしても暗くなってしまう。これに対して分割測光では、画面のどの部分にどんな明るさのものがあるのかカメラが判断し、そのまま撮影しても人物が暗くならないように露出を決定します。その他、逆光以外の明暗差がある条件下でも画面を分割して露出値を計算し、自動的に露出補正をしますから、初心者の方でも安心して撮影を楽しんでいただけます。



スポット測光について

図のように、ファインダー中央部の限られた範囲だけで露出を測りますので、この部分に露出を合わせたい被写体を入れて撮影してください。

ただし、この部分と他の部分の明暗差が大きい場合には、全体の明るさを考慮して露出を決めないと、不自然な写真になってしまうことがあります。



中央重点測光について

中央重点測光では、8分割測光のように逆光のときなどに、カメラが自動的に露出を補正することはありませんので、経験的に露出を補正して撮影したい場合などにご利用ください。

測光分布は、上図のようになっており、高さが高い部分(中央部分)ほど感度が良くなっていることを表しています。